

自分で道を切り開いてきた茨女たち

わたしらしく

生き方をクリエイトする

何かと「女性の活躍」に注目と期待が集まる現代社会
自分が望めば、どんな生き方だって選択できる自由な時代
自由を与えられると、途端にどうしようか悩んでしまう
わたしは何をしている時に嬉しいの？楽しいの？幸せなの？
わたしはどうしたいの？
わたしらしい生き方って何だろう？

茨城県出身の

わたしらしい生き方を切り開いてきた
各地で活躍する等身大の女性に
これまでの選択と「いま」を取材。

茨女のいま。



撮影場所／霞ヶ浦総合公園

すずき なつみ 茨城県日立市出身。
茨城県日立第二高校を卒業後、茨城大学教育学部に進学。学業の傍ら、日立市を拠点に活動する「久慈浜ソーラン舞踊衆 羅森万」を中心にソーランを踊る。
踊る楽しさを伝えたいとの思いから、大学入学後はよさこいサークルを創設するなど、地元のチームのみならず活動の幅を広げる。現在、県内外の様々なイベントにて毎週のように演舞を披露している。

教育学部B棟

鈴木 夏海 20歳

久慈浜ソーラン舞踊衆 羅森万 踊り子
茨城大学よさこいサークル 海砂輝 代表



お金にも形にもならないけれど 地元にも恩返しができるから。

ことを学びにきたのも、全部「羅森万」がきっかけかな。高校生活は「羅森万」が無かったら何してたんだろうってくらい。練習↓学校↓練習↓学校のサイクルで私を育ててくれたのが「羅森万」だから、チームを作った地元の人たちや地元に戻返しをしたいと思うようになりました。

—— 茨城オリジナルの良さはなんだと思いますか？

海。海沿いのまち、日立市で、海と共に生きてきたからそう思うのかもしれないけど、茨城の海って独自の雰囲気があると思うんです。沖縄の海ははしゃげるイメージだけど、日立の海は落ち着く感じ。嫌なことを波がささってくれる感じがして、悩みができたらく海に行っている。観光地とか名前のある場所も素敵だけれど、私はもっと多くの人に茨城の海の魅力を感じ取ってほしいです。

—— 今から行くとしたら茨城県内のどこに遊びにいきたいですか？

日立でゆっくりできたらなあと思います。大学が水戸なので、大学生になってから、日立に滞在している時間

—— 現在行っている活動について教えてください。

大学生活の傍ら、地元日立市の伝統芸能を継承する「久慈浜ソーラン舞踊衆 羅森万」を通して、県内外のイベントでソーランを踊っています。ソーランだけではなく、よさこいの団体でも踊ったり、大学でよさこいのサークルを立ち上げたり。地元の人から外国人留学生まで、多くの人によさこいソーランの魅力を伝える活動をしています。踊っている頻度は、ほぼ毎日！

—— なぜよさこいソーランの活動をしているのですか？

自分が味わったよさこいの楽しさを伝えたいと思ったのが一番の理由かな。あとは、私を育ててくれた地元日立への恩返しという思いもあります。「羅森万」の踊りを見てお客さんが笑顔になってくれるのって、学生の私にもできる恩返しだと思って。地元で根ざしたチームならではの良さですね。

それに対して、純粹な学生だけのチームを創ってみたいって、大学入学と同時に創設したのが茨城大学のよさこいサークル「海砂輝」です。学生だけだと結構ハードな動きにも挑戦できるのと、県内外から集った学生に踊りの良さを広めたくて。メンバーは意外にも、外国人留学生が多いんです。はっぴやハチマキにすごく興味を示してくれて、日本での思い出作りのために参加してくれる人もいるくらい。そういう人たちが楽しんでくれる姿を見ると、やって良かったなって思います。

—— 活動やプライベートのことで、ターニングポイントとなった出来事があれば教えてください。

今の生活の基盤も、地元が好きになったのも、日立を元気にしたくて地域おこしに役立つ

がどんどん減っていくって感じです。日立を元気にしたい気持ちほどんどん上がついていくのに。ああ、帰りたい。日立以外で遊びにくくしたら龍神大吊橋のバンジージャンプをやってみたいな！今年二十歳になったんですけど、二十歳の歳に行くとサーブスがつかうらしくて、これはいいタイミングだ！と思って。日立を愛しすぎて他の茨城のことを全然知らないで、茨城の色んな所に遊びに行ってみたいな。

—— 女性として、活動とプライベートの両立で苦しんだことがあったら教えてください。

女性らしくなりたい。漁師が豊作を願うために始められたソーランは踊るのも男性の方が多いので、踊りを踊っているところか男勝りになってしまっている。髪を伸ばしたり、スカートをはいてみたり、メイクの勉強をしたり。基本的なことだけど、「大学生」にいる時くらいは、女らしくなりたいです。

—— 10年後、どこで何をしたいのですか？

日立の子もたちに、地元のことを好きって思ってくれるような機会を与えられる仕事をしてみたいです。

EDITORIAL COMMENTS 編集部レポート

よさこいソーランを通しての地域活性活動だけではなく、「日立を元気にする方法を学びたくて茨城大学の社会文化コースにきた」と語る鈴木さん。行動や言動に垣間見える芯の強さが印象的でした。大学で学べる座学だけではなく、自分にできる形で地域おこしを試みる活動のひとつ一つが、鈴木さんなりの「学業」なのだと感じました。

茨女レポーター：檜山 加奈